

保育園の遠足で実践 <ごちそうはどこだ>

柳河加奈子（東京都）

はじめに

わたしが非常勤保育士として勤務している保育園は、ビルに囲まれた都心の一角にあり、決して自然環境には恵まれていない。人工に作られた園庭は庭というよりはテラスのような作りで、クラス全員で走り回って遊ぶことも難しいほどの狭さだ。近所に公園は複数あるが、車の交通量の激しい中にあり、ペットの糞やごみが山積しているところも多く手放しでは遊べない。また公園への往復だけで時間がかかってしまい、長時間、公園で遊ぶこともできないでいた。

とはいっても、子どもたちの自然に対する関心は強く、園庭に置いてある植木鉢をひっくり返しては、ダンゴムシやナメクジを発見したり、蟻を見つけては大喜びをしていた。昆虫や植物の図鑑も大好きで、いつも熱心に読んでいた。自然と接することが少ない分、好奇心は旺盛で憧れも強いようだった。

そんな中、秋の遠足で小石川植物園（東京都文京区）に行くことになった。小石川植物園は植物学の教育・研究を目的とする東京大学の教育実習施設であり、広大な敷地にはたくさんのお木々が繁り、珍しい植物もたくさん見られる魅力的なフィールドだ。そこで思う存分、子どもたちに自然を触れさせてあげたい、ネイチャーゲームにも挑戦してみたいと思い、上司に相談したところ、快諾していただけたので、わたしが担任をしている年少クラスでネイチャーゲームを実験的に実践することになった。

導入

何のゲームにしようか指導員ハンドブックの対象年齢を参考にして考えたりもしたが、子どもたちの様子や下見にいったときに感じた印象、季節柄などを踏まえて「ごちそうはどこだ」のアクティビティにすることにした。

「ごちそうはどこだ」はハンドブックによると5才からと出ている。しかし、毎日接している気心しれた子どもたちとの実践であることと、前日から準備や動機づけもできること、導入を工夫すれば、年少児でも楽しめるのではないかと、思いそれに決めた。なによりわたしの好きなアクティビティだったので、その「思い」も大切にしたい。

導入は、遠足当日ではなくて前日の給食前にあるお話の時間にした。クラスの雰囲気から、物語性を持たせ、興味をひくような話と演出を考えてみた。とある森に住むリスのリス太郎から手紙がきた、という設定で話を始めた。

「大変だよ！保育園にリスのリス太郎から手紙が届いたよ」そう言って持ってきた木の箱の中から手紙を取り出して、子どもたちに見せた。手紙は、遠足の下見で拾った大きな柏の葉にきらきら光るラメ入りのペンで直接書いた。

「こんにちは。ぼくはリスのリスたろうといます。あしたはえんそくなんだって

ね。ぼくもあした こいしかわしよくぶつえん にいくから いっしょにあそぼう
ね。ぼくのたからものを いっしょにおくります。ぼくのすきなたべものはなんだ
かしっていますか？」

読み上げると「えーっ、リスから手紙がきたの」と驚いて見たがったり、「リスはどんぐり
や松ぼっくりを食べるんじゃないの」などと手をあげていう子もいた。その後、リスが出
てくる絵本を読んだり、リスからの宝物として、箱の中に入れておいた下見で拾ったいろ
いろな種類のどんぐりや色々な木の実、落ち葉などを見せた。

それらは、部屋に置いておき、自由に見られるようにしておいた。

● 子どもたちの様子と反省

導入の時間は、遠足のお菓子詰めをみんなですんでいた後だったので、なかなか興奮が収ま
らず、ざわざわした状態での導入になってしまった。時間がこしか取れないので、決行
してしまったが、導入は大切なので、もう少し計画的に考えておけばよかったと反省する。
しかし、子どもは聞いていないようでも実はちゃんと聞いているらしく、給食を食べる頃
になると「リスにあったら、かけっこを競争したいな。リスはぼくより早いかな。でも僕
は木には登れないよな」など話し出す子や、「早くリス太郎に会いたいな、リス太郎はリン
ゴを食べるのかな（給食にリンゴが出ていた）」などと話だす子もいて盛り上がっていた。
また、使用済みの切手を貼り、直接葉っぱに字を書き、手紙の末尾には図鑑で調べたリス
の足型をスタンプしたこと。リスの写真を同封したことなどが子どもたちの心をつかんだ
ようだった。

給食の後にもリス太郎の手紙を何度も読んで欲しいとせがまれたり、どんぐりや木の実を手
にして「明日、わたしもこれを拾うの」と言う子もいた。迎えにきた母親に説明をする子
どもの姿もあった。

とにかく明日の遠足を楽しみにしてもらい、リスとどんぐりの関係をさりげなく知ってもら
う。フィールドで見つけられる木の実や落ち葉の現物を手にとって見せる。いろんな形
のどんぐりを知ってもらう。という導入の目的は果たせた。

当日の実践内容

年少クラス 20 人（3 歳 8 名・4 歳 12 名）と私を含む保育士 4 名での遠足になった。現
地では、まずはみんなで植物園を散策した。昨日見た木の実や落ち葉などを探したり、聴
診器で木の鼓動を聞いてみたり、大きな木にみんなで抱きついたり、思いっきり走り回っ
たりと、いつもはできないようなことを思う存分した。そんな遊びの中でも「リス太郎、
いないね」などといって木の上を見たり、「このどんぐりはリス太郎にあげるの」と拾った
どんぐりをずっと手にしている子もいた。

休憩で子どもたちがトイレにいつている間に、時間を見計らって、私だけは集団から離れ、
目星をつけた場所にセッティング（どんぐりを隠す立木のまわりをロープで囲んでおく
リス太郎からの手紙とどんぐりを木のウロに隠しておくなど）をした。そして、準備が整
ったところで全員を呼んだ。

●実践の手順

20人をあらかじめ3つのグループに分けておき、1つのグループに保育士が1人入るようにした。子どもたちが集まったところで「リス太郎の手紙が届いているはずなんだけど、見た人いる？」と話かけると、目ざとい男の子が「あそだ！」と木のウロに入っていた木の箱を見つけ出してくれた。箱の中には、「ごちそうはどこだ」で使うどんぐりと、リス太郎からの手紙を入れておいた。みんなの前で手紙を読み上げる。

「うさぎ組のお友達へ

みんなおはよう！リス太郎です。今日は、とても楽しみにしていたんだけど、小石川植物園にはいけなくなりました。ごめんね。この頃、急に寒くなってきたでしょう。だからぼくは冬の支度をしなければならなくなっただ。冬になっても大好きなどんぐりが食べられるように、今からどんぐりをたくさん隠しておかないといけないんだよ。そうしないとね、どんぐりのすきな熊とかカラスとかねずみとか他のリスとかに食べられちゃうからね。だから、ぼく、とっても忙しくなっちゃったの。どんぐりをうめたり、葉の下に隠したりしているんだよ。

みんなと遊べなくなっちゃったので僕の特別などんぐりを少しあげるね。箱の中を見てみて！（実際に見せるとみんな歓声をあげる）みんなもこのどんぐりをリスになって、森に隠してみてください。隠すときの注意を教えてあげるね。その一、誰かにとられないように上手に隠すこと。その二、でも自分で隠したどんぐりが見つからないと食べられなくなるから隠した場所は覚えておくこと。その三、お友達と仲良く隠すこと。

ではまたね。今度 森で会おうね。どんぐり隠すのがんばってね。 リス太郎より」

楽しみにしていたリス太郎に会えない、ということではがっかりした子もいたが、思ったより納得する子も多く「お支度で忙しいならしかたないよね」とか「私もどんぐり隠してみたい」などと言出す子もいた。

「リス太郎からもらったどんぐりで、みんなもリスになってどんぐりを隠してみる？」というと、みんな乗る気になった。各グループに入る保育士をボスリスと呼んで、子どもたちをフォローしてもらいつつ参加してもらった。隠すどんぐりは1人2個として、1つのグループで15個とした。あとは、おおかたマニュアル通りにゲームを展開した。

どんぐりをボスリスと数えたりすることは皆で楽しくできたが、足し算、引き算の数字の概念や比較はまだ難しいために前より「少なくなった」「増えた」「となりのグループより多い」「少ない」など言葉使いを工夫した。結局、数個のどんぐりが見つからなかった。わかちあいのときに「見つからなかったどんぐりはどうなっちゃうのかな」と聞いてみると、しばらく考えていた3歳の男の子が「成長する！」と大きな声で言ったのでびっくりしてしまった。まさか、3歳児からそのような発言が聞けるとは思わなかったからだ。その子の言葉を受け、皆をどんぐりの木の下へ連れて行き、芽吹いて成長した20センチほどの高さの子どものどんぐりの木を紹介した。芽が出始めているどんぐりも見つけることができ、土の中のどんぐりは成長して、やがて大きな木になることもある、と子どもな

りに理解できたようだった。

また「どんぐりを隠しても他のリスに取られちゃうこともあるね」と言う子もいた。リスのようにどんぐりを隠すことでリスの生態に興味を持てれば、それだけで、今回の目的は達成できたと思っていたが、3歳児でも「動物と木の実の関係について学ぶ」「貯蔵によって森の木々の種が芽を出すことができるという仕組みを学ぶ」というねらいまで触れることができるようだった。

● 子どもたちの様子と反省

幼児なので、隠すどんぐりの数を減らし、1人2個としたが、幼児のほうが小学生などに比べてあまり考えないで隠すので、すぐ隠し終えてしまった。また簡単に見つかってしまうので、どんぐりの数は1人4個程度でもよかったかもしれない。幼児だからどんぐりの数を減らすという発想は間違いだった。

今回は、あらかじめ拾っておいたどんぐりに白いペンでトトロの絵を描いておいた。絵を描くか、描かないかで迷ったが、茶色いどんぐりはカモフラージュされてしまうし、描かれているほうが子どもにもわかりやすくなるので、かえってよかったと思う。また、あまったどんぐりは遠足の記念としてお土産に渡せ、「リス太郎からのどんぐり」と言って好評だった。

全体をふりかえって

ネイチャーゲームを展開するにあたって、リスを擬人化することはどうなのだろうか、と悩んだこともあったが、結果的にみると今回の方法はうまくいったと思う。年少児だからこそ出来る、導入や展開の方法だったと思う。

同僚からリス太郎に会えないのはかわいそうだから、ペープサートでリスを作って、それをリス太郎として登場させるのはどうだろうか、と助言を受けたが、そこは本物にこだわりたいかった。あえてリス太郎と出会えないことで、リアリティをもたせ「未来」につなげたかった。いつか本物のリスと出会ったときに、リスの存在を近いものとして感じられたり、リスについて興味が自然にわくようにしたかった。(その期待通りに、本物のリスはどの森に住んでいるのだろうと、母親と調べて会いにいった子どもも出てきた)

また、遠足での実施にあたっては、同僚の保育士の力なくしては実現できなかった。今回、ネイチャーゲームのリーダーはわたししかおらず、他の保育士はネイチャーゲームがどういうものかも知らなかった。なので、二人の保育士には、手順やねらいのほかに、ネイチャーゲームについて話たり、レイチェルカーソンの「センスオブワンダー」の話などを引用して、理解してもらえるように努めた。なので、とても気持ちをくんでくれ、子どもたちをうまくリードしつつも一緒に楽しめたようだった。もう一人の保育士には手順のみを説明しただけだったので、「勝敗ゲーム」のようにとらえてしまったところがあり反省した。ネイチャーゲーム未体験者に、サポートをしてもらうときは、手順やねらいだけでなく、ネイチャーゲームについてもきちんと説明すべきだと感じた。

今後の課題

遠足での経験は、私の保育観にも大きな影響を与えた。自然の直接体験が大切だということを知っていたが、「実感」としては感じていなかったかもしれない。喧嘩が絶えず、集団で皆と同じことができない、落ち着きのない子も多いクラスであったが、遠足中は喧嘩も起こらず、突然いなくなる子もいなかった。おもちゃも遊具もない自然の中で、みんなニコニコ、瞳はきらきら、そして互いに優しくかった。

いつもは汚れるのを気にする子も泥だらけになって遊んだり、すぐに泣く子が木の根っこに躓いてひどく転んでも泣かなかった。自然にぜんぜん興味がないと思っていた子が、大人もなかなか見つけられないような珍しい木の実をたくさん見つけられたり、いつも物を取り合う子が「2つ拾ったから、1つあげるね」と気前よく木の実を友だちにプレゼントしている姿も目にした。

いつも反抗的で、懐疑的な子が、リス太郎に会うことをとても楽しみにしていて、リス太郎にこっそり手紙を書いて持ってきていたり、いつも目立たない子が実は自然に詳しくて、まわりの子に色々なことを教えてあげて注目されたり。

日常の保育では気づかなかった新たな子どもたちの一面を多く知ることができた。「場」の力は大きいのだと思う。子どもの様子がこんなにまでも激変するとは思わなかった。

また根強いフィードバックにも驚いている。遠足から数ヶ月が過ぎた今でも「リス太郎は、ちゃんとどんぐりを食べられたかな」「もう春だから、リス太郎も忙しくないかな」とか「あのとき見つからなかったどんぐりの芽は大きくなったかな」「どんぐりは成長するんだよね」など断続的に話しをしてくる。また、リスに関する話には敏感であり、どんぐりへの思い入れもどのクラスより強い。

遠足で拾ったムクロジの実でシャボン遊びをしたり、種でマラカスを作ったり、タラヨウの葉に手紙を書いたりという遊びも発展して出来た。自然は不思議で面白いものであることを子どもたちは遠足を境に感じる事ができているようだ。

わたしは前年度までは学童クラブに勤務しており、保育園で担任を持つのは初めての経験だった。なので小学生と比べると、幼児にネイチャーゲームは難しいと構えてしまうところがあった。けれど、今回「ごちそうはどこだ」に挑戦して感じたことは、「ねらい」をはずさなければ、工夫次第で幼児なりのネイチャーゲームができるかも知れないということだった。また幼児期こそネイチャーゲームをはじめとする自然体験は大切なのではないかという思いも強くなった。

今後の課題としては、失敗を恐れずに、いろいろな方法を模索しながら幼児を対象としたネイチャーゲームを計画していきたいと思う。また、日常の保育の中でも、自然に親しめるような環境作りを心がけ、ネイチャーゲームをより楽しめる土台作りもしていきたい。